

## 5月総評

西躰 かずよし

### 人間のかたちを崩す花衣

音無 早矢 埼玉県

花衣は、花見にゆく女性の晴れ着こと。それが人間のかたちを崩す様子は、不意に訪れる死を連想させる。衣装のなかに宿る暴力性。それは、こんなにも不穏で美しいものなのだろうか。同じ作者の作品に「暑いねといって包丁振り下ろす」というのがあるが、こちらも日常に潜む暴力性を上手くとらえている。

### すきだった絵のこと、海

村上 すう 長野県

絵はもう描けなくなったのだろうか。おそらく描けなくなったのではないだろう。屈託なく描くことを好きと言える季節が過ぎたのだろう。最後に置かれた「海」ということば。それは語り手自身の救済のようにも見える。

### 「 」の緊急連絡先、晩夏

玻璃 愛媛県

鉤括弧と句読点を置くことで視覚的にバランスをとっているように感じる。空白と切れ。書かれなかつただろう緊急連絡先にまで押し寄せてくるかのような晩夏。どこか不穏な空気を漂わす作品である。

世界から色の名前が消えてから  
みっくすじゅーす人種のぼくら

小宮 颯人 東京都

ここでの色は、世界の規範を表しているように見える。もしそうなら僕たちは何を語ればいいのか。語り手は、色について語るの意味がすでに失われてしまっていることに、気づいているかのようである。「ぼくら」が「みっくすじゅーす人種」という滑稽なものでしかないのは、その虚ろさに因るのかもしれない。

コピーアンドペースト繰り返して  
星へ

中原紘 山口県

星まで行く方法として、あえてコピーアンドペーストを選ぶというのはおもしろい。じっさい仕事では、習ったり練習したりするよりもコピーアンドペーストでやり過ごすことのほうが効率的だったりする。でもこの作品のおもしろさは、そこだけではない。技術の粋を集めた星へ行くといったことまでもが、コピーアンドペーストで出来てしまうのではないかという、複雑な感情を巧みに表現している点にある。それは、あと100年もすればAIのほうが上手く俳句をつくるようになるのではないかといった心情とどこか似ている。

病院の中にローソン花の雨

Azusa 京都府

おそらく語り手は病院のなかでローソンを見つけたのだろう。そして桜の咲くころに降る雨も。そんなささやかな発見が、なぐさめになることがあるかもしれない。そのまなざしに映るのは、人生における小休止ともいうべき、雨と小さな店舗であったに違いない。

保健室のカーテンを頬に当てる  
泣けば泣くほど庭になってく

小里京子 北海道

保健室だから学生の頃のことだろうか。カーテンに頬を当てて泣くという行為は、大人になることへの拒絶のようにも見える。また、泣いて出来る庭は、そうした拒絶のあとの諦念のようにも感じられる。同じ作者の作品に「チョコレートがない父が帰らない」、「続柄に何も書けない遠花火」というのがあるが、いずれも語り手の心のひだを上手くとらえている。

未来へと向かう  
からだは便箋ね  
どうか、  
やさしく記されていて

こはくいろ 大阪府

作者は、肉体が壊れやすいもので、いずれは滅びてしまうものでしかないことを分かっているのだろう。だからこそ便箋というかけがえのない便りへと、それを置き換えたのだろう。せめて記されるその内容が、やさしいものであることを願って。

靴下に縫われた鳥がうれしい  
平日の朝

大山夏緒 京都府

靴下の鳥は母親が縫ってくれたものだろうか。それとも父親が縫ってくれたものだろうか。それが誰であれ、その人は語り手にとってとても大切な人であったに違いない。いつもの朝がちがう朝へと変わる瞬間。きっとそれはかけがえのない瞬間だったに違いない。

金魚は名前を付けると溶ける

長谷川柊香 宮城県

通常ペットとの関係は名前をつけることから始まる。だから「名前を付けると溶ける」という一節は異様だと思う。だがその異様さこそこの作品の魅力だろう。関係を編もうとした途端にその対象を壊してしまうという、抗いようのないものについての表現。同じ作者の作品に「クレヨン指でぼかすみたいに／星をなでる」というのがあるが、作者には、ぼかす（汚す）という行為と、なでる（愛でる）という行為が相似なものとして認識されている。自身の加害性への言及という点において、これらの作品は共通している。